

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	本山 美久仁
論文担当者	主査 中込 隆之
	副査 黒田 悦史
	副査 新村 健
学位論文名	Elevated anti-gliadin IgG antibodies are related to treatment resistance in schizophrenia (抗グリアジン IgG 抗体価の上昇は統合失調症の治療抵抗性と関連する)
論文審査の結果の要旨	
<p>(背景)近年、統合失調症は非均一な集団であると考えられており、その発症機序として栄養の関連性を示唆する報告があり、統合失調症の患者ではグルテン感受性の保有率が健常者に比べて高いことが欧米では報告されている。そこで、今回、申請者らは、本邦におけるグルテン感受性の保有率、グルテン感受性を持つ統合失調症の臨床的特徴について検討した。</p> <p>(方法) 1. DSM-5 で統合失調症と診断された 20～70 歳の患者群 60 名と、年齢、性別をマッチさせた精神疾患のない健常対象者 50 名を対象に血液サンプルを用いて、グルテン感受性関連抗体である抗グリアジン IgG 抗体を ELISA 法で測定した。2. 統合失調症の患者 60 名を抗グリアジン IgG 抗体が陽性と陰性の二群に分類し、発症年齢、入院回数、社会的な生活機能、QOL、抗精神病薬投与量、統合失調症の症状重症度、治療抵抗性などを含めた背景因子に関して比較検討した。3. 抗グリアジン IgG 抗体が陽性の統合失調症患者 11 名を治療抵抗性の有無により、2 群に分類し、抗グリアジン IgG 抗体価について比較検討した。</p> <p>(結果) 1. 抗グリアジン IgG 抗体の保有率に関しては、統合失調症患者と健常対象者で有意な差を認めなかった。2. 抗グリアジン IgG 抗体値に関しては、健常対象者に比べ、統合失調症患者で有意に高いことが判明した。3. 統合失調症患者のうち、抗グリアジン IgG 抗体陽性患者は抗グリアジン IgG 抗体陰性患者と比べ、治療抵抗性を示し、抗精神病薬の投与量も多いことが分かった。4. 治療抵抗性を示した抗グリアジン IgG 抗体陽性の統合失調症患者の抗体価は治療抵抗性を示さなかった抗グリアジン IgG 抗体陽性の統合失調症患者に比べて有意に高いことが分かった。</p> <p>本研究において申請者はグルテン感受性と統合失調症の関連性について調べ、その結果、抗グリアジン IgG 抗体値の上昇が統合失調症の治療抵抗性と相関することを発見した。よって本研究は学位論文に値すると判断した。</p>	